≪「今後の県立高等学校の在り方に係る基本計画（第２期）」の素案について≫

中国新聞：　中国新聞の長久です。在り方計画の中の、（2）のウの分の総合型高等学校の設置を検討とあるんですけれども、例えばどのような学校をイメージされているのか、例えば、現在の学校を改変するようなものではなくて新たに設置するようなものになるのか、その辺り、今現状で考えていらっしゃることがあればお伺いします。

教 育 長：　文部科学省の方からも普通科の在り方等について、指針もございましたように、これから時代に合わせてですね、考えていく必要があるというふうに思っております。

中国新聞：　ただ、そこまで固まったものはないということですか。

教 育 長：　そうですね。全くもう、これから考えていくというふうな形です。

中国新聞：　分かりました。再編整備の統廃合に関する基準について、新たな基準として２年連続で、新入生 20 人未満または、全校生徒 60 人未満という基準の根拠を改めて教えてください。

教 育 長：　はい。先ほどちょっとお話申し上げましたけれども、今の現行のですね、基準がございますけれども、そのときよりも児童生徒の数が減っているということと、それから、他の都道府県の再編整備状況、基準を鑑みまして、これがぎりぎりじゃないかということで、設定をいたしました。

中国新聞：　これまでの説明の繰り返しになるかもしれないですけれども、１学級規模校について一律の基準を設けることの必要性というものを県教委としてどのように考えておられますか。

教 育 長：　もちろん基準を設けないというような選択肢もあるかと思いますけれども、ある一定基準を設けませんと、なかなかいろいろ決めていく時にですね、モチベーションにもならないかなというようなことと、高校の場合、文理、文系と理系に大学等に進学する際に分かれますけれども、そういった選択肢を分けたときにですね、かなりやっぱり人数が少ないと、１人であったり２人っていうクラスがたくさんになってしまって、それは、学校であるところの集団っていうところが担保できないというところで、この数をお示ししたというようなことがございます。

中国新聞：　分かりました。あとですね、〔資料３ページの〕ウの（ア）の「近隣に他の高等学校がなく、他地域への通学が極端に困難な学校が対象となった場合は別途検討する」とあって、〔資料３ページの〕最後のところ、「再編整備を行うことにより高等学校への通学が困難となる地域が生じる場合」と２つの言及がありますが、最初に申し上げた、別途検討するというのは、通学が困難にならないような地域が生まれないように留意するというような意味合いでしょうか。

教 育 長：　そうですね。なるべくそこは教育〔の機会均等〕の担保ということで、留意をしていきたいということです。

中国新聞：　ただ他方で、そういうケースが生まれるっていうことも、やはり今後想定しなきゃいけないというようなことなんでしょうか。

教 育 長：　そこは今後、どうなるかということでございますので個々を見ていかないと、公共交通機関の状況とか、あるいは生徒自身の希望ですね、近くにあっても地元の学校に通いたいのかそれとも別のところに通いたいっていう希望等々もあると思いますので、そこはこれから個々の状況、公共交通機関の状況等々を見ながら考えていく必要があるというふうに思っております。

朝日新聞：　朝日新聞の黒田といいます。先ほど質問があったところと少し重なるところもあるんですけれども、まず、お示しいただいた（３）のウの（ア）ですね。１学年１学級規模の全日制の高等学校の条件、人数において一定の基準を設けなきゃいけないということで、いろいろ考慮して、残しているところもある中で、今後、この条件に該当してくるような学校さんも出てくることがあると思うんですけれども、そういった状況の中でどのようなことを検討していきたいかというの

を教えていただけますでしょうか。

教 育 長：　ちょっと冒頭申し上げましたけれども、この１学年１学級規模ということだけではなくて、県立高等学校の課程と学科等の在り方について、やはり十分に検討していかないといけないのではないかと思っております。１つは、普通科、何をもって普通って言うかですけど、これは文部科学省の方からも示されましたけれども、普通科の特色化とかあるいは魅力化、新たな学科を設置するとか、時代、不易流行のですね、流行の部分を少し取り入れなければいけないかなというふうにも感じておりますし、あるいは従来の課程に、この枠組みにとらわれない形で、今、通信制の学校に行かれるお子さんも増えている中で、フレキシブルな学びを提供する学校の設置とか、あるいは先ほど冒頭に御質問のございました総合型の高等学校の設置とか、高等学校とは一体何かっていうところから、人数だけではなくて、学びの機会を保障するということをやっていかなければいけないかなというふうに思っております。

朝日新聞：　ありがとうございます。もう１つ追加で、そのあとの留意事項のところですね〔資料３ページ〕。「自治体から県立高等学校がなくなることのないよう留意する」とありまして、自治体内というのが市町ということだと思うんですけれど、いろいろな見方があるだろうし町もいろいろな大きさの市町があったりしてなかなか行きにくいところもあるのかなとは思ったりもするんですけれど、この、「自治体内からなくなることないように」ということについて、もう少し具体的にどのような意図があるのか教えていただけますでしょうか。

教 育 長：　ありがとうございます。現在も 23 市町すべての市町に高校があるわけではありませんし、おっしゃるように広さ、大きさ、人口、それからあと、生活圏をともにしている自治体も多数あると承知しております。一概に言えないんですけれども、１つの基準として書かせていただいているものでございまして、じゃあ今ないところは新たに作るのかというふうに言われると、なかなかそう、そういうところではないっていうこととか、あるいは近隣にあれば、もちろん通えるわけでございまして。ここを留意すると。そういったことも含めて留意するという意味で書かせていただいております。

≪大谷翔平選手による小学校へのグローブ寄贈について≫

中国放送：　中国放送の平田と申します。大リーグの大谷選手が全国の小学校にグローブを贈ると言われていまして、広島県内の小学校にも届くと思われますけれども、大谷選手がコメントで、「子供たちが野球・スポーツに触れて興味を持つきっかけになって欲しい」と言われています。これについて教育長ですね、どういうふうに受けとめられたか、お聞かせいただけますでしょうか。

教 育 長：　はい。私も報道でしかちょっと。まだ知りえてなくてですね、確か６万個でしたっけ。ということは１校につき３グローブずつかなというふうに思っておりますけれども、豊か〔豊かな心と身体育成課〕で何か聞いていますかね。

豊かな心と身体育成課係長：　まだ連絡はきておりません。

教 育 長：　連絡が来てからいろいろ検討していくことになると思いますが、いろいろな方が学校のために、こういった寄付とか、思いを伝えていただくことは本当に大きな応援になるので、ありがたいなと思っております。

中国放送：　大谷選手の寄贈についてですね、お感じになったことがあれば教えていただけますでしょうか。

教 育 長：　そうですね。大谷翔平選手だけではなくて、県民の方もそうですし、学びの寄付金もですし、様々な方が応援してくださっていることについて、心から感謝をしております。

中国放送：　これをきっかけに広島県内の小学生たちがスポーツに興味を持ってくれればと、そういう意味も含まれているのかなと思います。そういう面では、いかがでしょうか。

教 育 長：　広島県はやっぱりカープファンが多いので、野球ということに、このニュー

スで野球に興味を持つお子さんが増えると。野球だけじゃありませんが、様々な種目について夢を持って、目指してもらえたらいいなと思っております。